

特集論文

新しい学力観に基づく無試験の大学入学選考制度の興廃

—オレゴン州の経験に学ぶ

橋本 昭彦*

*国立教育政策研究所

Lessons from Oregon's Proficiency-based Admission Standards System

Akihiko Hashimoto *

* National Institute for Educational Policy Research of Japan

This article aims to see the lessons obtained from the rise and fall of the Proficiency-based Admission Standards System (PASS) in Oregon. Started to be developed in 1994, and began its trial operation in 1999, PASS judges whether the students are well prepared for entering universities. It is unique of PASS to focus on the promotion of student's proficiency before entering universities, and on the authentic assessment of proficiency.

PASS was not successfully implemented; we must say so when we look at its side as an admission measures that its management was not easy. However, there are some remarkable contributions to the challenging situation of real education in Oregon; we can say so when we view PASS as a guideline or a gauge that supports the standard based learning movement with a focus on proficiency.

While providing with a glance at what PASS looks like, the article will point out some constructive movements or symptoms that PASS had brought to Oregon; such movements that could lead the education for young people to be much more proficiency based, K-16 articulated, authentically assessed, and rich in cooperation between school systems.

Keywords : Proficiency, Articulation, Standard, Assessment, Oregon

キーワード : 新しい学力観、高大接続、教育改革、教育評価、オレゴン

1. はじめに

1994年、オレゴン州では、理想のようにみえる州立大学入学者選考制度が始動していた。Proficiency-based Admission Standards System、略称PASS(パス)である。PASSは、直訳すれば「熟達度に基づく入学基準体系」となる。この制度をひとことでいえば、大学入学希望者に対して、プロフィシエンシー(熟達度)という新しい学力観に基づく学習内容規準に準拠し、その学力評定を認定された高校教師が行う原則のもとで、書類選考によって入学の可否を決定するしくみである。

* 〒100-8951 東京都千代田区霞が関3-2-2 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 総括研究官

PASS が理想的と思われるのは、第 1 にその拠って立つところのプロフィシエンシーという新しい学力観であり、第 2 には志望者に受験準備学習を強いることのない学力評定的方式である。前者のプロフィシエンシーとは、オレゴン州が 1991 年の「21 世紀のためのオレゴン教育法」で打ち出した、行為する学力・見える学力を意味する新概念の学力像である。州教育省では、公立の全小中高等学校が準拠すべき「オレゴン・スタンダード」と呼ばれる学習内容規準を作り、スタンダードにそった学力が身に付いているかを見るための一連のアセスメント（考査）の体系を作成した。その学力像に基づいて、オレゴン州大学機構（州立 7 大学で構成）でも独自の学習内容規準を一覧化した。後者の学力評定では、高校教師が生徒への作品評価や観察評価を行うための評価基準を定め、高校間・教師間で評定に甘い・辛いという不公平が出ないように研修と評定資格認定の仕組みを整備した。

PASS 制度は、経済界からの公立学校教育への要求に応え、学習者の未来を切り開くものとして、州の教育政策関係者の期待を集めた。州内外はもちろんわが国でもシンポジウムなどを通じて宣伝され、一定度の注目を浴びつつ 2001 年度から運用が始まったが、この制度を利用して入学した学生は少ない。SAT 試験などの従来型の考査を経て入学してくる学生が大部分を占める状況が続いており、失地回復する見込みは無いと思われる。このように、PASS は、普及に失敗した制度ではある。しかし、その合理的な理想や、制度設計の周到さは、高大の教育接続を課題とする他地域にとって学べる余地が大きく、その後のオレゴンの教育改革にも影響を与えている。

PASS の詳細についてはすでに発表しているので、本稿では概略しか示さない¹。本稿では、大学・高校教育の現場において PASS が定着しなかった状況を、既存の研究成果によって確認した後で、近く予想される PASS の「廃絶」後に、州の教育界に残される遺産についての展望を試みたい。「理想的」ともてはやされた高大の教育接続制度を、ただの打ち上げ花火に終わらせることな

¹ 拙稿「新しい接続制度の導入期における諸問題—オレゴン州 PASS の理想・現実・展望—」（荒井克弘・橋本昭彦編『高校と大学の接続』玉川大学出版部、2005 年、第 7 章）参照。なお、わが国において PASS を紹介した早期の業績には、池田輝政「オレゴン州のチャレンジ：世紀の変わり目における K-16 の教育改革」（『教育制度学研究』第 4 号、1997 年）、横井敏郎「高校教育と大学教育の接続をめざした教育改革—オレゴン州のカリキュラム改革とアセスメント・システム—」（『大学教育における大学・地域連携の意義に関する実証研究—ポートランド州立大学のキャップストーン・プログラムと北大—』北海道大学高等教育機能開発総合センター・生涯学習計画研究部、2001 年）、山岸みどり「オレゴン州における到達度評価に基づく大学入学選考—Proficiency-based Admission Standards System(PASS)」(同前書収載) などがある。

く着実な教育実践へとつなげようとする関係者の足跡を描くことが本稿のねらいである。

2. 高校教育にかかわる2系統のスタンダードとPASSの概略

PASSについての詳細は前著にゆずることとしたが、一つだけ確認しておきたいのは、教育の内容規準・評価基準が、州教育省によるK-12（幼稚園から高校までの学校教育）体系のものと、大学機構側のPASS独自のものと、2系統が併存しており、PASSに関わろうとする高校は両方に関わらざるを得ないということである。

州教育省のスタンダードは、K-12の各学年について、各教科領域についての学習指導要領のような文書である。各学年でスタンダードを満たしているかどうかは、毎年行われる州統一アセスメントや教師による観察評定など、プロフィシエンシーを測るにふさわしいように工夫された評価方法によって評価される。児童生徒にとって、各学年のスタンダードを満たすことは、べつに進級や卒業のための必須条件ではない。ただ、インセンティブを高めるために、一定のプロフィシエンシーの修得を証明できた者には修了資格証が授与される。すなわち、第10学年以降は、10学年相応の到達度が認定され次第、「基礎教育修了資格証」(Certificate of Initial Mastery ; CIM) が取得でき、さらに「応用教育修了資格証」(Certificate of Advanced Mastery ; CAM) の取得が勧められる²。

いっぽう、州立大学機構が定めるPASS入学のためのスタンダードは、英語、数学、自然科学、第2言語、芸術、社会科学の6内容領域にわたって、31の観点からなる。英語の例でいえば、「用途に応じた書き方ができる」など6つの観点があって、それぞれについて「できるか・できないか」を高校が提出した成績資料から判定する。31観点のうち18は大学入学のために「必須」の観点であり、それらをすべて満たせば特に試験を受けなくても入学が認められる³。

PASSの入学基準では、多様な属性の入学志望者に対応するため、数種類の

² CIMは、州の統一テスト（アセスメント）の得点と、「ワークサンプル」と言われる生徒の作品・提出物・口演などを担当教師が絶対評価して得た評点を合わせた点数によって授与される。州教育省等のウェブサイトによれば、実際の取得率はCIMの場合で公立高校生の2～3割である。取得しないと卒業できないというものではないが、学習成果の一つの目安となって高校教育界にはほぼ受け入れられている。河野銀子「高校教育修了資格のゆくえーオレゴン州のCIM・CAMの動向」（荒井克弘・橋本昭彦編著前掲書、第8章）を参照。

³ 大学機構のPASSについては、ウェブサイトがあるが（<http://www.ous.edu/pass/>）最近は目立った更新もない。

評価手段が用意されている。主要な3種を簡単に紹介するが、筆頭に PASS 認定教師による評定 (PTV ; PASS Teacher Verification) が挙げられる。これは、オレゴン州立大学機構から必要なトレーニングを受けて認定された高校の教師が付けることができる評定である。認定教師は、自分の担当科目の入学スタンダード一つひとつについて、授業期間中の生徒の発表・作品・提出物その他を根拠として評定を付ける。18ある PASS の「必須スタンダード」のうち3項 (英語・数学・自然科学が各1) は PTV しか評価手段が無い。PASS の制度設計上この PTV が主たる評価手段であり、オリジナリティも強い。ついで挙げられるのが、前述した CIM の読み替えである。18の「必須スタンダード」のうち、英語の1項、数学の2項、科学の1項の計5項目が CIM によって自動的に満たされる。さらに、SAT などの全国的なアセスメントも部分的に読み替えられる。PASS の31のスタンダードのうち、SAT の得点による読み替えが利くものは9項目あるほか、国際バカロレア (IB) の成績は22項目、アドバンスト・プレースメント (AP) の成績は18項目、それぞれ読み替えが利く。以上の3種の他にもオレゴン州内のテストなど、個別のスタンダードごとに特殊なアセスメントが指定されているが、本稿では紹介を省略する。

3. 選抜装置としての失敗とその要因

(1) 運営面の困難

PASS の運用は2001年から始まったが、新たな入学者選考方式として機能させるという意味では、すでに失敗している。利用者数は伸び悩み、学区によっては利用しないことを決めており、挽回の目途は立っていない。PASS の利用は、運用当初から希望制であって、従来型の入学者選考資料である SAT 受験成績や高校の内申書の成績 (Grade Point Average ; GPA) の利用を選択する者が断然多かった。オレゴン州立大学機構7大学では、PASS を利用した入学者が最も多いオレゴン州立大学 (Oregon State University ; OSU) でさえ2003年の秋の新入生3,018人のうち、PASS の成績調書を提出した者は750人である。その他のキャンパスでは、学都ユージーン市のオレゴン大学 (University of Oregon) や最大都市ポートランド市にあるポートランド州立大学 (Portland State University) では開始数年でそれぞれ数名程度であり、農村部にあるウェスタン・オレゴン大学 (Western Oregon University ; WOU) でも例外的な取扱がみられるばかりである。

利用者数が少ない理由としては、オプション的な選考手段という位置づけのほか、PASS 運用の事務的な制約が挙げられる。何よりも、2種類が併行す

るスタンダード+評価の体系が、高校生の成績を評価・管理する高校現場・学区事務所の過剰な負担になることが根本的な原因である。そこから派生する要因として、研修体制の不十分さ、PTV 有資格教員の少なさ、成績処理・データ管理のための物件費や人件費などの財政問題などがある。その他にも、教育改革の内実に関わる本質的な要因としては、PASS のもたらす新しい教科構成・カリキュラム・授業の組み立てそのものに対する高校教師の抵抗感や、高校側に選抜のための評価を委ねることへの大学教師の不信感も PASS が進まない要因だということを別稿で指摘した⁴。

オレゴン大学のあるユージーン学区の事務所では、高校教育担当者が学区としては PASS を使わないという。「PASS は使いにくい。大学ごとに位置づけが違う。生徒に人気がない。そのわりに、余分な仕事を強いられる。高校の教育スタンダードに接続していない中で、入学選抜のためにだけ評価するのは無駄だ。」という⁵。同学区内の高校に他州からの異動してきた科学の教諭は、「プロフィシエンシーを身に付けさせるやり方は、理念はいいけど時間やお金がないという現実がある。PASS も最初は、良いかなとおもったけど、大学が使わないから意味が薄れる。評価に時間がかかるし、教育の本体ではない」といい、ワークショップの研修を受けた PTV 教師を揃えた同校でも、結局は学校の方針・学区の方針として PASS は使わないことにしたという⁶。同じ高校の進路指導のカウンセラーは、「個人的に利用希望があれば対応することになっているが、希望者はほとんどいない。PASS は大学入学のオルタナティブだからだ」という⁷。同学区の別の高校の教諭も、「PASS よりも CAM をやる方に重点をおいている。PASS は知られてもいない。生徒も知らないし、ニーズがない。大学自身も GPA を使っている。大学の先生もみんながみんな知っているとは限らない。」⁸；「(卒業生の多くを占める) 州外大学に進学する学生のためには使えないし、成績評価に二重手間がかかるので使いたくない」⁹という。最大規模のポートランド学区でも、州都のセイラム学区でも事情は似ている。

⁴ 前掲拙稿。

⁵ ユージーン学区事務所・高校担当 Sam Tupou 氏へのインタビューによる。ユージーン市、2004.10.6。

⁶ シェルドン高校・科学教諭 Isaac Sanderson 氏へのインタビューによる。ユージーン市、2004.10.4。

⁷ シェルドン高校・進路指導担当カウンセラー Carey Beneke 氏へのインタビューによる。ユージーン市、2004.10.4。

⁸ サウス・ユージーン高校・社会科学教諭 Steven Smith 氏へのインタビューによる。ユージーン市、2004.10.5。

⁹ ウィンストン・チャーチル高校・科学教諭 Tim Whitley 氏へのインタビューによる(五島政一・松尾知明と共同質問)。ユージーン市、2004.10.5。

セイラム学区の高校教諭は、「ポートランド学区もセイラム=カイザー学区も PASS は使っていない。私個人は大学機構のパスの委員会に出ているが、学校としてはやっていない。教師たちは工面できる時間がないので、やりたくない。子どもも親も誰もやりたくない。個人的にはプロフィシエンシーベースはよいと思うが、時間がとれない。」¹⁰

以上のように、PASS は州立大入学のための必須要件でないばかりか、州外の大学を志望する高校生にはほぼ無関係なので、高校側では取り組むメリットがあまり無いのである。

(2) 州政府・大学側の施策後退

このように紹介すると、PASS が普及しなかったのは高校現場における労務負担回避への圧力や動機付けの不在だけが原因のようにみえるかもしれない。しかし、そうした現場の状況は財源の手当をほとんどしなかった州政府や PASS 成績の活用を進めなかった大学側が作り出している面もありそうだ。PASS 開発期・導入期のころには高校と大学の連携やスタンダード理解や評価法に関する研究会や合宿の開催で熱気があったものが、2001 年度の正式導入後は、経済状況の悪化等を背景に取り組みの縮小がみられたことや、PASS 優等生への奨学金が一年で打ち切られたことなどは、前著でも紹介した¹¹。しかしその後、学区から得た情報ではさらに劣悪な取り組み状況がみられる。

ポートランド近郊のノースクラカマス学区事務所では「州は CIM・CAM は後押しするつもりがあるが、PASS については財政的にサポートしていない。」「PASS の話は長いことしたことが無い。保護者も PASS というものを知らない。過去には、PASS に対する一定の期待はあった。ジョイント・コラボレーションなどをするなどの一定の活動をしていた。大学と高校との協力関係は以前にはあったが今は無い。学区にはリソースもない」¹²という話を聞いた。また、ユージーンの高校でも、「4 年前には、PASS による高大接続に関するミーティングがあったが、最近はもうなくなった。ここ 2 年間、PASS は名前すら聞いたことがない」¹³という話を聞く。資金源が枯渇して高大連携の作業も途絶えたというところである。

¹⁰ マクネアリー高校・数学教諭の Marie Cramer 氏へのインタビューによる。カイザー市、2004.2.17。

¹¹ 前掲拙稿。

¹² ノースクラカマス学区事務所・高校教育担当 Matt Utterback 氏へのインタビューによる。ミルウォーキー市、2005.10.11。

¹³ ウィンストン・チャーチル高校・科学教諭 Tim Whitley 氏へのインタビューによる（五島政一・松尾知明と共同質問）。ユージーン市、2004.10.5。

高大の連携のみならず、大学内部でも PASS への対応をめぐる不徹底は放置され続けたようである。高校の進路指導担当カウンセラーは、「PASS は当初大学が入学選抜に使うと言っていたのに、実際には使わなくなっているので、先細りしている」¹⁴という。また、進んだ学区で PASS の理想を実現しようとしても、大学側で受け入れの準備を整えていないことは、「各大学の入学担当者 (recruiters) は、PASS について教師や保護者が質問しても答えることができない。彼らは、旧来の GPA と SAT のこしか語らない。」「州教育省とは、PASS の基準をクリアしたら (より程度が低いはずの) CIM の資格証が取れることにして欲しい、と掛け合った。でも、州は CIM のテストを受けないと PASS の成績は認めないという。<PASS の基準を満たせば、それで十分ではないのか?>と念を押すのだが、州教育省は連邦政府の (州の統一試験を重視する) 政策を気にして、CIM の試験は受験するように、という。」「そもそも、PASS は、大学側が「大学入学に十分な学力を身につけるための体系」として提案してきたものだ。我々はそれを気に入って、成績評定の方法も身につけた。PASS は、大学に入ってからの成功可能性を SAT や GPA よりもはるかによく予知する。そんな PASS をどうして使わないというのか。私には理解できない。大学機構には、せめて PASS を SAT や GPA と対等に扱うように求めている。」「おそらく、PASS の成績はコンピューターで機械的に処理できないのだ。実際に内容を見る必要がある。ところが大学の入学事務室では、PASS 成績のほかにも、旧来の成績書類も山ほど押し寄せる。志願者から提出される書類が多すぎてデータをみるのに忙しすぎるようだ。その点、PASS は非効率的なのだ。」などと語る学区の学務担当者の言葉から裏付けられるであろう¹⁵。

このように、PASS の普及については明らかに施策の停滞がみられる。PASS についての人々の理解を促進し、実施方法を広め、資源を支弁すべきところ、大学や州政府では有効な対策を取らなかった。州は、大学機構の総長室予算を 1,200 万ドル削減し、その影響で完全実施すべき PASS についての手当が十分にできなくなったという。その結果、2005 年 8 月 1 日に PASS のオフィスは縮小し、学位号を持った推進担当者は転出した。スタッフも慣れた人が後退して明確なリーダーシップを発揮しにくくなった。予算の削減はきつくて、高校に行ったりできないし、PASS の維持が難しい状態に陥った、という¹⁶。

¹⁴ シェルドン高校・進路指導担当カウンセラーの Carey Beneke 氏へのインタビューによる。ユージーン市、2004.10.4。

¹⁵ ビーバートン学区事務所 Gary Sehorn 氏へのインタビューによる (河野銀子・松尾知明と共同質問)。ビーバートン市、2005.10.11。

¹⁶ PASS の導入事務室の Mark Endsley 氏へのインタビュー (札幌市、2005 年 6 月)

大学としては、せっかく高大間の打合せや研究会を設定したのに、各校からまんべんなく派遣を仰ぐよりも、特定校から多くあつめる集中方式をとるべきであった、との反省の声も聞かれた¹⁷。

以上で、PASS が入学者選抜装置としてはうまく機能していなかったこと；その理由として、PASS の原理が否定されているというよりも、投下する手間や資源に応じた便益が回収できないことや、教育政策側や大学側で徹底した実施態勢を整えなかったことなどが理解できるであろう。

4. 教育装置としての成果

(1) 州教育省高官のある「総括」

選抜装置として失敗した PASS ではあるが、新しいカリキュラム・授業・学力評価の形を提案する教育装置としては局所的・部分的な成果を挙げている。筆者の現地調査において、インタビュー等を通じて大きな情報を提供してくれた協力者の一人であるオレゴン州教育省首席政策官の Patrick Burk 氏は、PASS の開発期・導入期を通じて、図 1 に示した 4 つの成果があったという。

Burk 氏の説明によると、PASS のもたらした教育上の成果とは、大きく分ければ 2 種類に分けられる。第 1 が大学をめざす高校生の学習を評価する「方法原理」面での成果であり、上掲の 1 と 3 が該当する。第 2 がそうした高大の教育接続の問題に関心を持つ教員の集団が校種を超えて出てきたという成果で

1. 学習スタンダードに基づく考査、というカルチャーを州立大学の中に埋め込んだ。
2. 大学と幼小中高の教員間の協働関係を醸成した。
3. 生徒の作品や提出物を、「熟達度」(プロフィシエンシー) という観点から評価することに焦点をあてた。
4. 生徒に大学生活にそなえた適切な準備学習をさせるために協働できる集団を大学と高校の内部に産み出した。

(出典：Patrick Burk 「州政府の高大接続施策～高校現場の実態に根ざす多様な実践～」、国立教育政策研究所・文部科学省共催の平成 20 年度教育改革国際シンポジウムの発表資料(橋本訳)、2009 年 3 月。)

図 1 PASS のもたらした成果

23 日)、ポートランド州立大学で PASS 導入作業にあたった Dalton Miller-Jones 教授へのインタビューによる。ポートランド市、2005 年 10 月 10 日。

¹⁷ Dalton Miller-Jones 教授へのインタビューによる。ポートランド市、2005 年 10 月 10 日。

あり、上掲の2と4が該当する。筆者の見てきたところでは、これらの4項目は確かに認められる成果ではあるが、まだまだ萌芽的であると言いたい。ただ、指摘をしている Burk 氏が、ポートランド市の公立学校の教師・校長を経て州教育省に入り、学務担当の次官となり、次官を退いて現在の職に至った人物で、教育改革が学校現場に与えた影響を広く見てきたオレゴン州教育界の重鎮であるので、その観察は重視すべきであると考え。そこで本章では1990年代のPASSの開発過程における成果と、1999年以降の試行・実施過程における成功事例を紹介し、Burk氏の見方を肉付けしてみたい。前者の一部は筆者の旧稿¹⁸から採ったもので、後者は新たな事実の紹介である。

(2)PASSの開発過程における高大連携事例

大学機構では、いくつかの手法によって高大連携を組織し、PASSの制度改善やその運用方法の開発を進めた。1990年代に設けられた「PASS協力機関」(PASS partnership site) その開発・実験のために、地域の州立の高校・コミュニティカレッジ・大学をセットにした実践研究協力単位を組織し、これらをと称した。PASS発足の1994年度に4サイトが開設され、1995年夏にはこれに4高校が加わり、同年秋にはピュー慈善財団(Pew Charitable Trusts)の財政支援を受けてポートランド学区の12高校も合流した。夏季に「サマーレーニング」と称する数泊の全サイト合同合宿を実施し、PASS自体の改善点や問題点の洗い出しと、PASSに基づく授業実践の進め方や評価の方法について出された知見を交換して、実践的なノウハウの形成を図るものであった。

大学機構はまた、PASSの実践を拓げるための研修の場として、「PASS協力校」と呼ばれる高校における研修会を開いた。協力校は1995年度には30校であったが、1998年度には60を数えるに至った。研修会の開催形態は年を追って多様化し、PASSの基準に従って生徒作品の評価する「評定研究会」(scoring session) や、高校間・評価者間の評定較差の調整をめざす「調整研究会」(moderation session)などが実施された。

(3)PASSの試行・実施過程における高大連携～オレゴン州立大学の事例

大学機構の傘下7大学の間では、PASSの取り組みに温度差があったが、前述したようにコーバリスマ市にあるオレゴン州立大学(Oregon State University; OSU)だけは、1999年の前倒し試行開始以来、PASS利用による新入生を年間100人以上受け入れている。OSUの新入生においてももっと

¹⁸ 前掲拙稿。

も主要な入学選考資料は GPA ではあるが、PASS 成績をそろえた生徒は専攻決定において優先的に扱われる。「PASS 成績を取った生徒は、よく準備ができています。大学でよくやるし、残留率が高いから」という理由によるという。

OSU が PASS による高大接続に力を入れているのには、独自の背景がある。それは、OSU では州内出身の学生が 85% にのぼる「地域密着型」大学なので、州立高校から来る生徒も多く、高大の連携を取る余地が大きいことである。ちなみに、ユージーン市にあるオレゴン大学は 60% くらいが州内出身であるから、全学生の絶対数が多いことも手伝って、PASS が利用できない入学生の数が格段に多い。また、OSU では AP や IB クラス出身者の優先採用も行っており、PASS とは親和性が高い。各高校では、進路指導担当のカウンセラーは OSU が PASS に力を入れていることを知っていて、必要な学生に PASS 利用を促してくれるし、保護者たちにも PASS を満たすための要件などについての説明をしてくれる。

OSU では、手間がかかると嫌がられがちな PASS の選考事務についても独自の工夫をしている。入学志望者のデータ管理システムを民間会社との提携で開発し、PASS 情報を含めたデータ入力・データ管理を容易にした。その成績管理の作業は在学生の結成した会社に委託してやってもらっていて、安い人件費で入力ができる。ちなみに、入学事務室には職員が 30 人居るが、19 人が PASS 担当者だ。

PASS で入ってきた学生たちはよく勉強するし、大学教育によく適合する。この大学は、少人数指導が手厚い大学だが、PASS 入学者は知識学習は進んでいるので、すぐに実技的学習に入れる。たとえば、海洋学科に入った学生は、1 年生のうちから海洋実習に行ける。

但し、高校でうまく PASS を導入している高校は多くはない。ビーバートン学区はもっとも進歩的で PASS に熱心なところでレアケースである¹⁹。

(4) PASS を中心とした授業づくり～ビーバートン学区の事例

PASS に熱心に取り組んでいる数少ない学区として有名なのがビーバートン学区である。ビーバートンは、大都市ポートランド近郊の町で、丘陵の間に住宅地域や大企業の工場があり、比較的裕福な地域として知られる。ここでは、

¹⁹ 以上、この項は、オレゴン州立大学・入学事務室長、Michele Sandlin 氏インタビューによる。コーバリス市、2004.2.16。なお、この時のインタビューの際に、PASS 導入に熱心な学区や高校のメモを手渡された。それには、ビーバートン、ジャンクシオンシティ、サンセット、フォレストグローブ、ローズバーク、グレスジャム、バンド、などの学区名が書かれていた。

同学区内の2高校のPASSに対する取り組みをみてから、学区事務所の担当者
に尋ねた関連施策について紹介したい。

まずは、州のCIM取得率が60%にもなる学習熱の高い高校として知られる
サウスリッジ高校では、生徒の学習プロフィール管理・成績管理に力を入れて
いる。生徒は自分のCIMの取得のための要件をはじめ、PASS入学に必要な
要件を集めて、自分用のチャートに書きいれてゆくという。同校では、進路指
導担当のスクール・カウンセラーの他に、非常勤嘱託(週35時間労働)の「CIM
セクレタリー」が居てデータを管理しているので、生徒が自分の成績を管理す
るのも容易になっている。学区の方針として、「テスト不安症など、評価にな
じめない生徒たちには、州が指定する代替のアセスメント (Juried
Assessment) を駆使して対応している」としており、積極的に生徒に実績を
積ませている様子が見えがえる。学区全体で、高校卒業時の証書類(ディプロ
マ)は、CIMのテストをとりあえずクリアした卒業生に対する「ベーシック・
ディプロマ」、テストのみならず提出物(Work Sample ; WS)でも所定の評
価を得てCIMを取得した卒業生に対する「スタンダードディプロマ」、さらに
PASS及第レベルの成績を取った場合の「オナー・ディプロマ」の3段階にす
る予定を立てていた。大学進学者の9割は州外の大学等に出るため、PASS成
績を揃えてオレゴン州立の大学に入る生徒は多くはないが、IBコースの生徒
はほぼ自動的にPASS及第資格が取れるなど、PASSを一つの学力付与の目安
にしていることが解った²⁰。

次に、同じ市内のアロア高校でも、サウスリッジ高校と同様に学区の支援の
もとで、PASSを活用して大学進学レベルのプロフィシエンシーを身につける
ということであった。PASSの研修を受けてPTV資格を持った教師による数
学のAPコースのクラスを設けており、その中で、PASSのスタンダードを使
って授業作りを行い、生徒各人の学習の目標管理をしているとのことであつた²¹。

最後に、ビーバートン学区事務所のPASSへの施策と、その評価ぶりについ
て、聞いたところを紹介しておく。

まず、PASS関連の施策についていえば、同学区では、高校の英語や数学の
教師たちは、州が要求するワークサンプル(=CIMを取るための作品や課題
の評価)を生徒にやらせないという。教師たちは、PASSの基準に合う授業を

²⁰ サウスリッジ高校校長の Sarah Boly 氏へのインタビューと校内参観による。ビー
バートン市、2004.2.13。

²¹ アロア高校教頭 Art Heckel 氏・同校教諭 Misao Sundahl 氏へのインタビュー。ビー
バートン市、2004.2.18。

してきて、それにふさわしいエビデンス（成績を付ける根拠）集めをする。学区では、そうして独自に集めた作品や評価材料等で「ワークサンプル相当」と認定して成績データの中に登録するという。すなわち、州が重ねた屋上屋のような2重の基準に振り回されずに、PASSを授業の根幹に据え、評価の基本原則にしようとする見識がみられる。

次に、PASSの影響について聞いたところを整理してみる。生徒たちはPASSのスタイルの教育に慣れてきており、「大学をめざす勉強とは、どのようなものか」を理解し始めたという。でも、より重要なことは、むしろ生徒よりも教師が変わったことだという。PASSに準拠した授業をしようすると、昔と同じような授業はやっていられないという²²。けだし、PASS準拠の授業は、それを学ぶ理由も方法も、また満足な学習成果を判定する基準もあきらかにしながら行うものである。教師の側にもいっそうの修練が必要とされるものなのであろう。

5. おわりに ～PASSによる次代への教訓と示唆

本稿でみてきたように、選考制度としてのPASSは一部キャンパスを除いてほとんど普及しないままできた。恐らくは、「失敗」した制度として早晩静かに消滅することと推察される。しかしながら、PASSが内包していた学習観・授業スタイル・高大連携による学力育成等は、その種を胚胎させ、次代へと送られた形であり、先にみたPatrick Burk氏の見立ては一定度の説得力を持つと考えられる。すなわち、①「プロフィシエンシー」という一種の「生きた学力」を基幹にすえた学習スタンダードに基づく教育を、K-12から大学への教育接続の中で実現しようという学習カルチャー、②K-12から大学までの各教育段階の教員間の協働関係の醸成、③「プロフィシエンシー」という観点から生徒を評価すること、など、現代の教育接続の課題に応える明らかな方向性を示すための理論と実践が胚胎したと見られる。

このPASSの精神と遺産を受け継ぐ次の施策とは、さしあたり「エクステンデッド・オプション」「新ディプロマ」という新しい施策であろう。いまそれらを紹介する紙幅は無いが、これらはいずれも「プロフィシエンシー」を中核とした、高校生のための新たな学力保障施策としてすでに2006年から始動し

²² ビーバートン学区事務所 Gary Sehorn 氏へのインタビューによる（河野銀子・松尾知明と共同質問）。ビーバートン市、2005.10.11。

ている²³。このもとで、PASS に準拠するかたちで広まりかけた教育・学習がどのような展開を見せるか。それを追って、改革の行方を見極めることが、この研究の次の課題（そして研究としても、そこでおそらく一息つくことができる段階）である。

²³ Expanded Options については <http://www.ode.state.or.us/search/results/?id=350> 、 New Oregon Diploma については、<http://www.getreadyoregon.org/> 、を参照。